

えせグルメ  
(改)

コメディ

森野イブキ

今日は、職場の先輩と昼食だ。先輩はいつも食通を自慢げに、うんちくをたれるのが常だ。

先輩「一見、こういう小汚い店がうまいもんなんだよ、絶対な！」

その店は、本当に小汚いのもさることながら、見るからにまずそうな店だった。

後輩「はあ．．．．．そういうものですか？」

二人して席に着き、店のおばちゃんにさっそく注文をする。

後輩は、店内を改めて見まわしてみる。やっぱ、小汚い。いや、汚い。うまそうの、”う”の字も出てきそうになかった。

注文してわずか一分。二人の料理が同時に出てきた。は、早い。（早すぎないか？）

先輩「そら来た。俺の天井だ！」

後輩「僕为天ぷらそばも来ましたね」

さっそく、はしをつける先輩。後輩は、はしを持ったまま、様子をつかがう。

先輩「むっ．．．．．この、クシャツとした歯ごたえ。それに、この胸がむかつくような油臭さはなんともはや．．．．．」

先輩は、苦虫をかみつぶしたような顔をしている。ひたいには、油汗がにじんでいるようにもみえる。

後輩「先輩、それってマズイって事でしょう？」

後輩は恐る恐るそう言って、先輩の顔色をつかがう。

先輩は、無理やり作り笑いを浮かべた。

「いやあ～、急に俺、そばが食べたくなっちゃったよ～。そばのがまだしも．．．．．。そ、そうだ！俺のと交換しないか？これ、食いかげだけど、一口だけだしな。それに丼のが高いしな！」

後輩「え、え！？」

先輩の、有無を言わさぬ提案に、後輩の首筋から冷や汗が一筋流れた。

後輩の返事を待たずに、先輩は天井と天ぷらそばを入れ替えた。

そして、改めて先輩は天ぷらそばにはしをつける。

一口食べて、フリーズする先輩。

先輩「うっ．．．．．」

これだけの先輩のリアクションにも関わらず、後輩も天井を興味本位で一口食べてみる。

後輩「こ、これは．．．．．」

後輩の毛穴という毛穴から、汗が噴き出してくる。（うっ．．．．．）

しばらくの間、フリーズしていた二人だったが、同時に立ち上がってこう叫んだ。

二人「な、なんじゃこりゃー！！」

様子をうかがっていた、店のおばちゃんが今頃になって、お冷を持ってきた。  
そういう次元の問題じゃねー！！ と、後輩は心の中で叫ぶのだった。  
わり！半分は実話！？)

(終

えせグルメ (改)

<http://p.booklog.jp/book/51411>

著者：森野イブキ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/morinoibuki2012/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51411>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51411>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ